

一、次の各問に答えなさい。

問一 次の①～⑤の傍線部を正確に漢字で答えなさい。

- ① イデンシの研究をする。 ② 自分の意見をカンケツに述べる。 ③ キビしい寒さにたえる。
④ センモン書を読む。 ⑤ 弓をイる。

問二 次の①～④の傍線部の漢字の読みを正確にひらがなで答えなさい。

- ① 乳母車を押す。 ② 時雨が通り過ぎる。 ③ 竹刀で打ち合う。 ④ それは素人の考えだ。

問三 次の①・②の熟語と同じような意味を持つものはどれか。(選択肢)より選び、記号で答えなさい。

- ① 対等 ② 興奮
(選択肢)

ア、胸をなでおろす イ、腕を上げる ウ、肩を並べる エ、手に汗をにぎる オ、根も葉もない

問四 次の①～④の□には、反対の意味の漢字が入ることで熟語になる。それぞれ漢字一字で答えなさい。

- ① □ 失 ② 寒 □ ③ 可 □ ④ 師 □

が無い込むようになりました。それまでは、東京の研究会などに出て、誰からも声をかけられることなどなかったのに、先生と呼ばれる有名な人々からさえ声をかけられるようになりました。私は周りの空気が変わったのを感じました。

あぶない、と思いました。^③このままいくと、外からの評価にやられてしまう、と思ったのです。私は必死に自分に言い聞かせました。「受賞する前と後でおまえの書いたものが変わったわけではないのだよ」と。賞をいただこうといたたくまいと、書いたものは全く変わらず、ただただそこにあるのです。私自身だって、同じでした。受賞したからといって立派になどなるわけではない。私は書かずにはいらなかったことを書いただけで、昨日と同じ自分がそこにいるだけでした。変わったのは私をとりまく外側の世界だったのです。それも全体からみればごく限られた人たちのさらにほんの一部が——もしかしたら、その人たちのどうでもいい一部だけが——針の先ほど変わっただけかもしれないのです。そんなものに自信を与えられたり、奪われたり……。今思えば、私はあの時、ばかばかしい、といよいよはつきり思ったのかもしれない。その時かぎりの無責任な評価なんて少しも本質的なものじゃない。そんなものに、左右される「自信」もまた、と。

もしかしたら、たとえば学生の就職活動にも同じことが言えるかもしれないですね。何回も面接を受けたのに全部はねられた、生きていく自信がなくなった、と言って自殺する若者がかなりの数にのぼるとか。そんなことにあなたは自らの命を奪わ^はせてはなりません。就職試験に落ちるのは、あなたのせいではないのです。採^とるほうは、あなたが命をかけるほどに命をかけてやっているわけではない。そもそも外からの評価はあなたの本質とは無関係で、落ちたからといって、いちいち責任を感じたり、自分を責めたりする必要はないのです。採用試験に受かったからと自信を手にし(=自己評価を高め)、落ちたからと自信をなくす(=自己評価を低める)としたら、あなた自身はいつどこにいるのでしょうか？　そこまであなた自身を放棄^{ほう}してしまっているのでしょうか。それと同じ論理でいくなら、もし就職試験に受かったら、あなたは落ちた人を無能呼ばわりし、優越感に浸^{ひた}るといふことでしょうか。^④なんとあさましく、なんと馬鹿げたことでしょうか。

さて、長い間、若い人たちと多くの時を過ごしてきて、^⑤私が願ってきたこと。それは自信のあるなし、自己評価の高い低いはどうでもいいけれど、——だってそれは時間のものさしで測っても、空間のものさしで測っても、一喜一憂^{いつきいちゆう}すべきものではないのですから——まずは、自身を無条件に肯定^{こうてい}できるようになってほしい、ということでした。あるがままの自分を好きになってほしいということでした。いえ、好きにまでならなくてもいい。まあ、仕方ない、こんな自分でも受け容^いれてやるか、というところまでくれば、しめたもの。そう願ってきました。それは、自分に見切りをつけることではありません。それどころか、まるごとの自分と向き合い、まるごとの自分を引き受けて、その自分をしっかり生きてやること。そうです。誰もかわりにあなたの人生を生きることはいけません。あなたが生きるしかない。自分がどれほど、おバカさんに見えても、あなた自身を生きてやってほしい。そう切に願います。私は既存^{きぞん}の宗教のどれにも、まだ身をゆだねることができない

でいる者ですが、それでも思うのです。もし神がいるとして、その神があなたを愛し、生きてごらんと欲^ほすに、自ら、その神の手を払いのけるのは傲慢^{しょうまん}ではないかと。

そうです。生きてごらん、と言ってくれているのです。宇宙は、世界は、人々が遠い昔から生み出してきたたくさん絵も、音楽も、物語も。そこに自信^{じゆん}なんていりません。そんなのは、あつたつて吹けば飛ぶようなものです。世界を信頼して自らをゆだねればいい。自分で自分を評価する必要もないし、外からの評価に一喜一憂する必要もない。繰り返しになりますが、自分をまるごと受け容^いれ、丁寧^{ていねい}に、省エネしないで、つまりは手を抜かずに、生きてやる、それしかないように思います。^⑥そのとき「自信」は何の意味もなくなるに違いありません。

(清水真砂子『大人になるっておもしろい?』より)

〔注〕 ※1 アグレッシブ……積極的・攻撃的なさま。

※2 一喜一憂……状況の変化などちよつとしたことで、喜んだり不安になったりすること。

※3 既存……すでに存在すること。

問一 空欄【Ⅰ】に入る言葉として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア、なぜそんなこともわからなかったのか
- イ、なぜそのような言い訳をするのか
- ウ、なぜそんなに長く気になっていたのか
- エ、なぜもつと早く引かなかったのか

問二 空欄【Ⅱ】に入る語として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア、容姿端麗
- イ、自画自賛
- ウ、品行方正
- エ、八方美人

問三 傍線部①『自己評価』には参りました」とあるが、それはなぜか。その理由の説明として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア、「自信」の意味を、自分を「信じる」という意味ではなく「自己評価」と定義すると、常に他人と比べて自分の価値をはかることになり、その方がより周囲の人々の様子をとらえていたから。
- イ、「自信」の意味を、自分を「信じる」という意味ではなく「自己評価」としたことで、自分に自信のある人々が、いかに日ごろから積極的に努力をし続けているのかを知って、感心したから。
- ウ、「自信」の意味を、自分を「信じる」という意味ではなく「自己評価」としたことで、いかに日ごろから人々が、自分自身のことを信じていないのかを見事に言い当てていたから。
- エ、「自信」の意味を、自分を「信じる」という意味ではなく「自己評価」という意味にとらえた場合、作者自身の日ごろの行動に見事に当てはまっていて、反省させられたから。

問四 傍線部②「そういう人々に常に不安の影を見てとらずにはいられなかった」とあるが、それはなぜか。その理由の説明として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア、自信があると自他ともに認められているような人々は非常にアグレッシブなため、常に上を目指し続けており、どこかの地点で満足するということがないから。
- イ、自信があると自ら言うような人々の自信は、手に入れることが出来たとしても、他人と比べた結果に過ぎないために、常に失うことを心配し続けているから。
- ウ、自信があると自ら言うような人々の自信には理由がなく、勝手に自分の中で自信の理由を作り上げているだけに過ぎないために、常にその自信は不安定だから。
- エ、自信があると自他ともに認められているような人々の自信は、外からの評価によって決まっているために、その評価を上げようと必死に努力し続けているから。

問五 傍線部③「このままいくと、外からの評価にやられてしまう、と思った」とあるが、それはなぜか。その理由の説明として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア、先生と呼ばれるような有名な人々からさえ声をかけられるようになり、自分はその先生よりもえらいのだと調子に乗って、失礼な態度をとってしまうと思ったから。
- イ、その時もらった新人賞によって自信を持ってしまうと、外からの評価だけにふり回されることになり、自分の外からの評価は必ず下がっていくと分かっていたから。
- ウ、その賞が自分に与えられたことが間違いであり、この程度の評論で賞などをもらってしまうと、二度と自分の書きたい文章を書けなくなってしまうと思ったから。
- エ、その時にもらった新人賞は、あくまでもその場限りの無責任な評価であるため、そのことにとらわれすぎてしまうと、自分を見失ってしまういかねないと思ったから。

問六 傍線部④「なんとあさましく」とあるが、「あさましい」とはどういう意味か。本文中の意味として最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

- ア、みずぼらしい。
- イ、予想に反する。
- ウ、下品である。
- エ、中途半端である。

問七 傍線部⑤「私が願ってきたこと」とはどのようなことか。その説明として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア、若い人たちには、自分自身を好きになって、どんなことがあっても自分が一番大事であると信じていて欲しいということ。
- イ、若い人たちには、自分の実力にある程度で見切りをつけて、自分の身のほど以上の自信は持って欲しくないということ。
- ウ、若い人たちには、常に自信を持ち、周囲の人たちと競い合い続けることでお互いを高め合っていて欲しいということ。
- エ、若い人たちには、自分自身を好きにまでならなくとも、ありのままの自分を受け入れて、生き抜いて欲しいということ。

問八 傍線部⑥「そのとき『自信』は何の意味もなくなる」のはなぜか。「そのとき」がどのような時かを明らかにしながら、四十字以上六十字以内で説明しなさい。ただし、句読点も字数に含むものとする。

三、次の文章を読んで、後の各問に答えなさい。

「部活、休みたくないんだよ」

「お母さんはこじか休みがとれないの。ほかの時期じゃ、仕事の都合がつかないのよ」
「……」

「ほら、早く用意しちやいなさい」

お母さんは最後にそういうと、ポンポンと身体をたたいて部屋をでていった。足音が消えたところで、そっとタオルケットから顔をだす。そして、やっぱり今年もいくのかと、私は ^①大げさにため息をついた。

「いくのイヤっていつてるでしょ！ 部活も休みたくないっていつてるでしょ！」

そうはつきりといえたら、どんなにいいだろう。だけど、私はいつもその言葉をこくりと飲みこむ。さからったところで「仕事の都合」っていわれてしまったら、なんにもいい返せない。お母さんは、私の都合や気持ちより「仕事」が大事なひとだから。

小さいとき「熱は週末にだしてねえ」っていわれたことを、今でもよく覚えている。冗談じょうたんっぽくいつてたけど、私はあるときすでに、それがお母さんの本音だって、ちゃんとわかっていた。もちろん、いうとおりになんてできなかったけれど……。

毎年八月の半ばに、お母さんの実家である新潟のおばあちゃんの家遊びに行く。そのために、出版社で働いてるお母さんは、ふだんはいそがしくてもこの時期だけは一週間の休みをとるようにしていた。旅行代理店で働くお父さんはこの時期が一番いそがしいので休みがとれない。

【A】おばあちゃんの家には、いつもお母さんと私のふたりきりでかけていた。おばあちゃんに会うのは、全然かまわなかった。いっしょに住んでるお母さんのお姉さんにあたる光子おばさんも、市役所で働くおじさんのこともきらいじゃない。部活の強化練習を休むのだから、本当は全然かまわない。

【B】「一つ年下のいとこの千絵ちゃんに会うのが、イヤなのだ。千絵ちゃんは小さいときからわがままで、自分勝手に、いじわるで、そしてなにより私に対する態度は、最悪だった。」

「こういうのもってるっけいらね」

小学一年生のときに、スヌーピーのペンケースをおみやげにもっていくと、千絵ちゃんは包みを開けたとたんになんかいい放った。「お気に入り」のマグカップあるしな」

ムーミンのマグカップをあげたのは、四年生のときだ。

「今ダイエット中だっけいらね」

デイズニーシーのおみやげで缶入りのクッキーをもっていったのは、去年のこと。

こんな風に千絵ちゃんは、私がどんなおみやげをもっていっても不満そうだった。

「もう、来年は千絵ちゃんにおみやげなんかもってかないよ！」

毎回そんな千絵ちゃんの態度にムカついて文句をいうのだけど、お母さんはそれをゆるしてくれなかった。

「一週間もお世話になるんだから、おみやげぐらいいもっていくのは当然でしょ」

お母さんはそういうけど、べつに千絵ちゃんにお世話になるわけじゃない。ふとんを用意してくれたり、食事の用意をしてくれるのは、光子おばさんなのだ。

「そんなことないじゃない。いつも千絵ちゃん、あなたと遊んでくれるじゃない」
遊んでくれる……。

【C】千絵ちゃんは、私がいくといっしょに遊びたがる。でも、遊んであげるのは私のほうで、千絵ちゃんじゃない。

テレビゲームの対戦相手をさせられたり（私が勝つとおこる）、プールにつれていかれたり（千絵ちゃんが私に泳ぎを指導する）、自転車の二人乗りをさせられたり（運転するのはいつも私）……。楽しんでるのはあくまで千絵ちゃんだけで、私はちっとも楽しくなかった。

【D】四年前のあのときは、思い出すだけでもはき気がするほどだ。

「この飴の四つ葉のクローバーが描いてある包み紙を十枚集めると願いがかなうっけ、有里ちゃんもいっしょに食べて集めよう。ちゃんと食べながらじゃないといけないっけね」

そういう千絵ちゃんにしたがって、私は毎日十個もその飴を食べさせられたのだ。だけど四つ葉のクローバーの包み紙は一袋に一人入ってればいいという確率で、私は、三日目にはその飴を見るのもイヤになっていた。あのときお母さんは、助けてほしいとうったえる私にいった。

「いいじゃない、それくらい。つきあってあげなさいよ」

おかげで、私はその飴が大きらいになった。

「それに……」

お母さんが顔を明るくして、はげますようにつけくわえる。

「いつも光子おばさんが、あみぐるみを作ってプレゼントしてくれるじゃない」

それもまた、私をうんざりさせるだけだった。

「えーっ、こんげのいらね」

もし私が千絵ちゃんみたいだったら、きつとそういうだろう。おばさん手作りのあみぐるみはあんまりかわいくないし、もらってもうれしくないものだから。でも私はいつも精一杯うれしそうな顔をして、それをうけとっている。千絵ちゃんみたいな態度を私 گرفتたら、お母さんがゆるさないって知ってるから。

「おばさんからぬいぐるみもらったとき、もつとうれしそうにしなきゃダメよ」

よるこび方が足りないとお母さんからそんなチェックが入る。そのくせ、今までもらったぬいぐるみは、すべて私に通った保育園に寄付しているから、わからない。お母さんにとって大事なことは、
X
であって、せっかく作ってくれたぬいぐるみを大切にすることじゃないのだ。

「ああ、ヤダなあ……」

私はふたたび、雑誌をひらいて今年は千絵ちゃんになにをもっていこうかなやんだ。千絵ちゃんも今年は中学生。

「ありがとねー、大事にするっけねー」

私のおみやげに、そんな大人な態度をとってくれてもいい年ごろだ。

「なにこれ」

だけど千絵ちゃんは今年もまた、おみやげをうけとると不満そうに顔をゆがめた。

「千絵ちゃんにあいそうって思ったんだけど……」

私はさんざんまよったあげく、アクセサリーショップで千絵ちゃんにあいそうなハートのイヤリングをえらんだ。

「なんかハートってダサイ」

千絵ちゃんはそういうと、捨てるみたいにイヤリングをベッドの上に放りなげた。

千絵ちゃんの部屋は、ものであふれている。マンガ、雑誌、CD、化粧品、アクセサリー、ノートパソコン、ゲーム、ミニコンポ、テレビ

……。千絵ちゃんはなんでももっている。ほしいものはたいてい買ってもらえるので、プレゼントなんかもらってもうれしくないのだ。

「そっかあ……」

私はベッドに放り投げられたイヤリングを見つめた。あげたばかりのプレゼントをこんな風に捨てられたのは、はじめてだった。

「田舎の子に、このイヤリングのよさはわからないかあ」

私は少しいじわるな気持ちでいった。

「ちよっと、田舎の子ってなによ」

そのムツとした顔を見て、私は覚悟をきめた。今まで千絵ちゃんの失礼な態度にたえてきたけど、^②もう限界。今年是我慢^{がまん}なんかしない。いなりになんかならない。

「ここはそんなに田舎じゃないんだから」

だから千絵ちゃんの言葉に、私はくすりと笑ってみせた。

「全然ちがうよ」

そして、窓のほうによると、外の景色をながめながらいった。

「東京は、こんなにのどかじゃないもの」

③そこからは広々とした田園風景がながめられた。

「千絵ちゃんは、すてきなところに住んでるよね」

あぜ道にはむぎわら帽子をかぶって作業しているおじいさんがいて、すぐそばに軽トラックがとまっていた。

「私なんか、このあいだ、渋谷歩いてたら、女優の松嶋菜々子見かけちゃってさ」

私は窓の外に顔を向けたままつぶけた。

「テレビで見るほうが、きれいだがっかりしちやった」

本当は、松嶋菜々子なんて見かけたことはなかった。ただ、

Y

みたかっただけ。

千絵ちゃんに「東京なんて、空気も悪いし、人が住むところじゃねーろー」とか「有里ちゃんなんかくっせねえ？これが東京のおいなん？」

なんていわれたことがあったから、そのしかえしのつもりだった。

「ここに住んでれば、そんな風に芸能人見かけて、がっかりすることなくていいよねえ」

ふりむくと、千絵ちゃんはベッドの上であぐらをかいて、私のことをにらみつけていた。

「有里ちゃん……性格、変わったね」

④千絵ちゃんが、こわい顔で私を見ている。黒目の大きな目で、じつとにらみつけている。それに……。なんかいつもと言葉づかいがちがう。

こっちの言葉じゃなくて標準語でしゃべってる。

「そうかな」

私は、首をかき上げてとぼけてみせた。

「二人とも、ケーキあるつけこいてー！」

そこで、部屋の外からおばさんの呼ぶ声聞きこえた。おばさんはいつものようにこっちの言葉だ。それでも私の前では気をつかって、できるだけわかりやすい言葉で話してくれている。

「はよこんば、好きながん、えらばんねえてえ！」

二人がなかよくおしゃべりでもしていると思っっているのだろう。声ははずんでいる。

「はーい、今いきまーす！」

私は明るい声で返事をする。千絵ちゃんを置いて、さっさと部屋をでた。

階段を下りて茶の間にいくと、大人たちはおしゃべりをしながら私たちを待っていた。お母さんだけがあまり楽しそうに見えないのは、ひさしぶりの再会で緊張しているわけじゃなくて、こっちの言葉でしゃべらないからだ。東京にいるときは、ときどきポロツと新潟の言葉がでたりするの、逆にこっちにきたときのほうが気をつけてるみたいで、いつもよりよそよそしい感じのしゃべり方になる。

「千絵ちゃん、おみやげ、よろこんでくれた？」

お母さんがこっそりきくから、私はにっこり笑ってみせた。

「うん。宝物にするってさ」

千絵ちゃんにいじわるをいっとうしろめたさで、思わずウソをついてしまう。だけとお母さんのホツとした顔を見て、まあいいかと思った。

(草野たき『反撃』より)

問一 傍線部①「大げさにため息をついた」とあるが、それはなぜか。その理由の説明として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア、大きな声でため息をつくことによって、お母さんの耳にとどいて、自分の嫌だという気持ちが伝わればよいと思ったから。
- イ、何事も、自分の仕事の都合で話を進めてくるお母さんへの憎しみと不満があふれだして、大きなため息として表れたから。
- ウ、お母さんと一緒に新潟に行くことが本当に嫌だったのに、結局行くことになってしまったあきらめがため息に表れたから。
- エ、お母さんに逆らえない自分自身への不満と、お母さんへの反発の気持ちを大きなため息によって落ち着かせたかったから。

問二 空欄【A】～【D】に入る語の組み合わせとして最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- | | | | | | | | |
|-----|-----|---|-----|---|------|---|-----|
| ア、A | それで | B | とくに | C | しかし | D | また |
| イ、A | そして | B | でも | C | また | D | とくに |
| ウ、A | だけど | B | ただし | C | そして | D | つまり |
| エ、A | だから | B | ただ | C | たしかに | D | とくに |

問三 空欄【X】に入る文として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア、私がおばさんの前できちんとした態度をとること
- イ、保育園に寄付するためのぬいぐるみをもろうこと
- ウ、私がお母さんのいうことをきちんと守るということ
- エ、おばさんの機嫌をそこねないようにごまをすること

問四 傍線部②「もう限界」とあるが、それはなぜか。その理由の説明として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア、似合うと思って選んで買ったのに、自分の感性を馬鹿にされたと思ったから。
- イ、これまでも不満そうであったが、今年は投げ捨てるようにまでされたから。
- ウ、田舎に住んでいるにもかかわらず、東京で買ったものを馬鹿にされたから。
- エ、ハートのイヤリングが気に入っていたのに、「ださい」とまで言われたから。

問五 傍線部③「千絵ちゃんは、すてきなところに住んでるよね」とあるが、この言葉には「私」の、どのような気持ちが込められているか。その説明として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア、明らかにひどい場所なのに、わざと逆のことを言っただけで怒らせようとする気持ち。
- イ、のどかな風景で育ったのに、なぜ千絵はわがままなのか、という皮肉な気持ち。
- ウ、千絵が言うとおりに、ここは東京よりずっと居心地がよいことを納得する気持ち。
- エ、千絵がいやがると知っていてわざと「田舎」らしさを強調する意地悪な気持ち。

問六 空欄【Y】に入る語として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア、東京に住んでる人らしい自慢をして
- イ、テレビとくらべてがっかりして
- ウ、千絵ちゃんを困らせるウソをついて
- エ、田舎とはちがう渋谷の街を歩いて

問七 傍線部④「こっちの言葉じゃなくて標準語でしゃべってる」とあるが、この時、千絵の言葉が「標準語」になったのは「標準語」がどのような性質の言葉であったからか、そのことが書かれている部分を、本文中から十字以上十五字以内で抜き出し、はじめと終わりの五字を答えなさい。

問八 この作品から読み取れる内容の説明として当てはまらないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア、千絵にとって、「私」が反撃してくるようなことを言ったのは意外だった。
- イ、「私」は、お母さんに不満はあるものの、結局言われた通りにしてしまう。
- ウ、「私」は、千絵のようなわがままな人間に自分もなろうとして反撃をした。
- エ、「私」は、千絵が何でも与えられたことでわがままになったと思っている。
- オ、光子お婆さんは、「私」と千絵が本当は仲が悪いことに気付いていない。

